
始まりは突然（ぬらりひよんの孫）

kobayuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりは突然（ぬらりひよんの孫）

【Nコード】

N1504Q

【作者名】

kobayuki

【あらすじ】

リキオとツララのすれ違いから始まっていきます。

二人は自分の思いをそれぞれ分かったのに、二人を引き離そうとしているかのように次々と事件や事故が起きていく

それに屈しないで二人は自分の思いを伝える事ができるのか

パート1（前書き）

ぬらりひよんの孫の創作小説です。リクオ×ツララです。
軽くキャラの言い方が少しずれてるからかも知れません

パート1

ある晩、リクオはツララを自分の部屋に呼んだ。

ツララ「何ですか？リクオ様」

リクオ「いや・・・その・・・あの・・・」

ツララ「リクオ様？どうされたんですか、顔が真っ赤ですよ。・・・

もしかして、熱があるんじゃないですか？」

ツララは、そういうと自分のおでこをリクオのおでこにくつつけた。

リクオ「ちょっと、ツララ・・・その・・・」

ツララ「んん熱はないみたいですわね・・・おかしいですね

さつきよりも顔が赤くなっている気がするんですけど」

リクオはツララと正面を向き合って

リクオ「ツララ・・・その一つ聞いてもいいかな」

ツララ「いいですよ。なんでも答えますよ」

リクオ「じゃあ・・・好きな人はいるの？」

ツララ「えっ・・・それは・・・その・・・」

リクオ「やっぱり教えてくれるわけないよね・・・」

ツララ「いえ、違いますよ。答えられますよ」

リクオ「ホントに・・・じゃあ、誰なのかな」

ツララ「それは・・・総大将となる・・・」

リクオ「えっ、おじいちゃんが好きだったの！！・・・」

そうだったんだ・・・」

リクオは、うつむいてしまった

ツララ「違いますよ・・・総大将となるリクオ様です」

リクオ「そうか・・・リクオ様か・・・って・・・えっ？

いま・・・なんて」

ツララ「女の子に恥ずかしい事を何度も言わせないでくださいよ・・・

リクオ様が好きです」

リクオ「ホントに……うれしい……でも覚醒した僕と今の僕どっちが好きなの？」

ツララ「えっ、それは……その……」

ツララはリクオの顔をうかがっていても言いにくそうだった

リクオ「そういうことね……覚醒した僕の方がいいよね」

ツララ「そんな事は……ないです」

リクオ「ごめんね呼び出しちゃってもう帰っていいよ」

ツララ「……はい」

リクオはツララ出て行きドアが閉まると頬に暖かいしずくが伝っていた

それは、寝ても止まることはなく、朝になってようやく止まった。

リクオ「……忘れよう……」

ツララはリクオの部屋から出て行ったがやっぱりリクオのことが心配で戻ると

泣き声が聞こえており、入れなかった結局自分の部屋に戻ったがなかなか寝れなかった。胸の辺りが苦しく、切なかったそこで初めて気がついた

ツララ「私が本当に好きなのって……近くに居過ぎて、きずかなかった。……リクオ様。」

ツララは、知らないうちに涙がたれていた。その涙はとても冷たく痛かった

それはまるで氷のように……

パート2

朝から雨が降っていた。

リクオ「はあああああ」

総大将「どうした、そんなため息ついて」

リクオ「いや、別になんでもないよ」

総大将「それならいいんだが、困った事があつたら相談しなさい」

リクオ「はい、ありがとう」

総大将「気にするな」

リクオが部屋から出るとツララがいた

リクオ「あの・・・」

ツララはリクオが言う前に行ってしまった。

リクオ「はああ」

そして時は夜、リクオの家は騒がしくなっている

なぜかと言うと総大将が居なくなってしまったからだ。

それで今東北の妖怪が向かってきているという

だから、誰が指揮を取るのか困っている。

リクオ「僕が、指揮を取ります」

ヒトツメ「できるんですか？わか？」

リクオ「大丈夫です。いずれにせよいつかはこうゆう風に指揮を取らないといけないからね」

ヒトツメ「そうですね。任せましょう」

リクオ「からす天狗みんなを集めてくれ」

からす天狗「はっ分かりました」

そしてみんなが集まった。

リクオ「みんなの知っているとおりおじいちゃんと東北の妖怪が攻めてくると言う」

2つの問題が起きている。僕は、二手に分かれて事にあたりたいと思う

まずからす天狗を率いる総大将捜索チームと僕が率いる討伐チームに分かれたいと思う

からす天狗は一刻も早く総大将を見つけるために7、8人連れて探して行って欲しい

討伐チームは50人ほどで行く。ここはヒトツメ任せだよ
からす天狗「はっ、承知しました」
ヒトツメ「分かりました」

リクオ「さあ、討伐チームはさつき呼ばれたものだ

出発するぞ。準備は良いか？」

討伐チーム「おおおおお」

リクオ「じゃあ、行こう」

からす天狗「3代目があんなにご立派に……」

ヒトツメ「……」

ツララ「リキオ様……絶対守って差し上げます」

青田坊「どうした・雪女・なんか今日変だぞ」

ツララ「気のせいです。そんな事よりリクオ様を絶対守りますよ」

青田坊「あたりまえじゃねえか」

ツララ「なんか胸騒ぎがするから」

青田坊「そうか……でもまあ俺たちが守れば良いだろ」

ツララ「そうですね」

リクオ「ここで、陣を構える今日は休んでくれ明日に備えて」

討伐チーム「はい」

リクオたちが構えたのは小高い丘の上で東北の妖怪たちが来ててもここで食い止める作戦だ

ここなら、遠くまで見渡せるので有利である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1504q/>

始まりは突然（ぬらりひよんの孫）

2011年1月16日01時12分発行